

伊豆沼・内沼における外来魚対策について

1. 経緯等

伊豆沼・内沼では、特定外来生物であるオオクチバス等の食害により、平成 8 (1996) 年頃からゼニタナゴ(絶滅危惧 I A 類)などの在来魚類が大きく減少した。当事務所では、地元 NPO や有識者、関係行政機関等の協力を得て、平成 16 (2004) 年度からオオクチバス等の防除事業に着手している。

当所の取組みに加え多くの関係機関や関係者の取組みにより、ブルーギルやオオクチバスは低密度状態となり、ゼニタナゴなどの在来魚類の回復が見られるようになった。

具体的には、繁殖が困難な密度まで減少させた状態である遅滞相管理を目標として捕獲等の対策を行った。現時点では捕獲の圧力を弱めてしまうと、オオクチバスの個体数が再び増加する懸念があることから、引き続きこれらの取組みを進め、更なる低密度状態を目指している。

2. 令和 7 年度の取組状況

これまでの取組みを継続し、人工産卵床等による防除活動や魚類の環境 DNA 調査を実施した。また、密放流対策事業として普及啓発活動も実施した。

(1) 年度に引き続き、人工産卵床、三角網、定置網、電気ショッカーによる防除を実施した。

令和 7 (2025) 年は産卵床の駆除数が減少し、三角網により捕獲した稚魚は 7 個体であった。

令和 3 (2021) 年～令和 5 (2023) 年はオオクチバスの繁殖が増加していたが、令和 6 (2024) 年、令和 7 (2025) 年は減少している。今後も経過を注視していく必要がある。

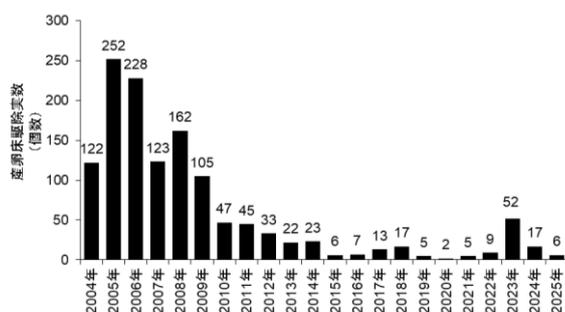


図 1. 人工産卵床によるオオクチバス産卵床駆除数.

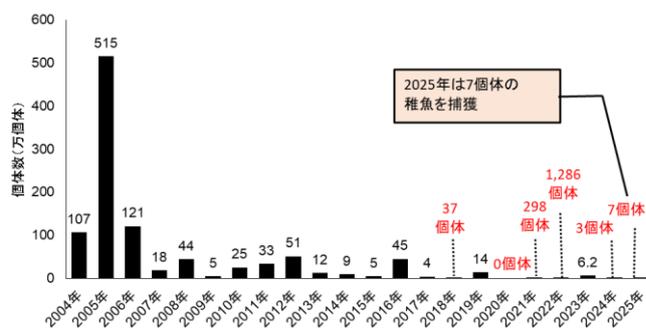


図 2. 三角網によるオオクチバス稚魚駆除数.

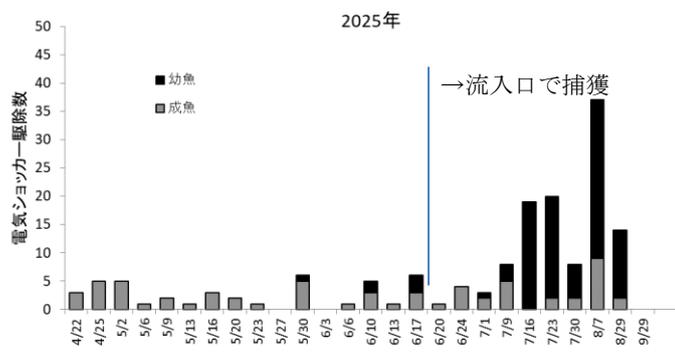


図 3. 電気ショッカーボートによる毎回の駆除数.

電気ショッカーボートの駆除では、6 月中旬以降、流入口にオオクチバスが集まり、今年度捕獲した 156 個体(成魚 63、未成魚 93)のうち、130 個体(成魚 38、未成魚 92)がここで捕獲された。産卵期が終わると、溶存酸素の条件が良好な流入口にオオクチバスが集まるのではないかと推測され、駆除しやすいポイントになると考えられる。

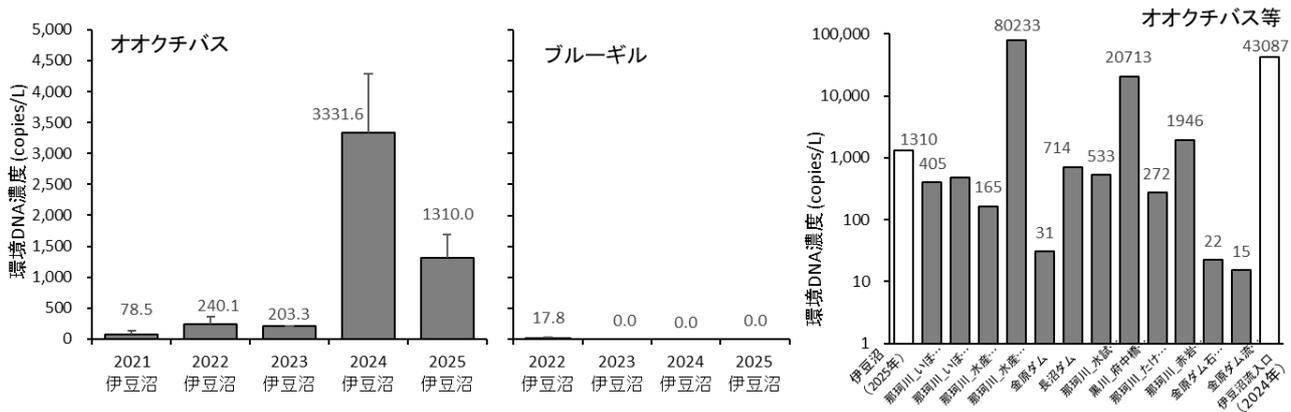


図 4. 伊豆沼・内沼のオオクチバスとブルーギルの環境 DNA 濃度の経年変化（左，中央）とさまざまな水域におけるオオクチバス等の環境 DNA 濃度の比較（右）．伊豆沼流入口（2024年）の値は令和 6 年度伊豆沼・内沼における外来魚遅滞相管理を目指した捕獲等業務報告書より引用．

環境 DNA によるモニタリングの結果、オオクチバスの DNA 濃度は昨年度に急増していた。本年度は昨年度より低下したものの、令和 5 (2023) 年以前と比較すると依然として高い値を示した(図 4 左)。一方、ブルーギルについては環境 DNA は検出されなかった(図 4 中央)。

他水域との比較では、本年度の DNA 濃度は昨年度の流入口における値より低いものの、他の河川等で報告されているオオクチバスの DNA 濃度と同程度であり、オオクチバスが一定の密度で生息していることが示唆された(図 4 右)。

ブルーギルについては捕獲結果と環境 DNA 濃度の結果は一致していたが、オオクチバスでは両者は必ずしも一致していなかった。捕獲を免れたオオクチバスを環境 DNA が検出している可能性もあるため、今後も環境 DNA 濃度のモニタリングを継続し、捕獲結果と併せて動向を注視していく必要がある。

(2) 密放流対策事業として伊豆沼・内沼に監視カメラ 1 基、注意喚起看板 4 基を令和 7 (2025) 年 6 月から 11 月まで設置した。この間、密放流は確認されなかった。また、住民や小学生を対象とした普及広報資料として、令和 4 (2022) 年度に作成したクリアファイルを約 100 名に配布し、密放流問題についての普及啓発を行った。

